岐阜農林事務所の普及活動状況　令和6年5月30日現在

今月の重点活動

■いちご　令和６年産の安定生産に向けた取組み

【遮熱資材の塗布作業】

冬春いちごの花芽は、短日低温により分化が誘導されるが、本県では平年９月 15 日前後が頂花房（最初の花芽）の分化時期となる。令和５年は９月上中旬の気温が非常に高温であったことから、頂花房の分化が大幅に遅れ、年内の出荷開始時期が大きく遅れることになった。

温暖化による影響が大きくなる中、いちごの安定生産のためには、花芽分化を安定させる育苗期の高温対策が喫緊の課題となっている。

このため、現在、各いちご部会・県・関係機関で、令和６年作での高温対策について協議を進めており、育苗ハウスへの遮熱シートの展張、遮熱資材の塗布等によるハウス内の高温抑制、間欠冷蔵処理の現地実証試験を行う予定となっている。

農林事務所では、これら現地実証試験について、環境測定、花芽検鏡等により支援を行っていく。

（園芸産地支援第二係）

ぎふ農業・農村を支える人材育成

■各務原にんじん　農業大学校学生の現地調査対応

【生産者から話を聞く農大生】

各務原市園芸振興会にんじん部会は、ＪＡぎふ各務原にんじん選果場を５月 11 日から稼働し、春夏にんじんの出荷を開始した。今後、６月末まで継続的に出荷される予定である。現在、出荷されている春夏にんじんは、１月に播種されたもので、今年は過去２年と比較して発芽揃いがよく生育は順調である。３月の低温の影響もあり、にんじんは高値が続いており、近年にない良い単価で販売されている。

５月 21 日に農業大学校の野菜専攻の２学年生が、にんじん産地の現地調査のため、ＪＡぎふ各務原にんじん選果場及び現地のにんじんほ場を訪問した。農林事務所は、選果場において生産者の持ち込みから出荷までの流れを説明した後、現地ほ場の案内を行った。

現地ほ場では、にんじん栽培に関する質問に対し、若手生産者から回答をもらい、にんじん経営について生の声を聞くことができた。農林事務所は、農業大学校生の学習や就農に向けて関係機関と連携しながら、支援していく。

（地域支援第二係）

安心で身近な「ぎふの食」づくり

■水稲　有機栽培に挑戦

【乗用型除草機による作業】

山県市では、化学的に合成された肥料及び農薬を使用しないことを基本として栽培した米を順次学校給食に提供できるよう、今年から試験的な取組みを開始している。

栽培する農事組合法人では、周辺のほ場から農薬流入のリスクがないほ場を選定し、温湯消毒した種子を有機栽培対応の培土で育苗、５月10 日に田植えを行った。

通常の除草は、田植機に装着した除草剤散布機により田植えと同時に農薬散布を行っているが、この試験ほ場では、除草剤を使用しないため、手間がかかるが乗用型除草機を使って３回除草作業を行うこととしている。また病害虫発生時にも殺菌剤・殺虫剤を使用しないことを基本としている。収量について確保できるか心配であるとともに、結果がどうなるか楽しみと新たな挑戦を開始した。

農林事務所では、ＪＡぎふと協力して生育や雑草発生調査を行い、収量や品質などを確認し、水稲作における有機栽培について支援を行っていく。

（地域支援第三係）

■春ブロッコリー　ＪＡぎふ西部地域春ブロッコリー研究会が統一目揃え会を開催

【統一目揃え会の様子】

春ブロッコリーの出荷が本格化する中、ＪＡぎふ西部地域春ブロッコリー研究会は５月 27 日、黒野農産物流通センターにおいて、生産者・関係者など 13 名出席のもと統一目揃え会を開催した。

令和６年産春ブロッコリーの販売状況について情報交換を行うとともに、現物・荷姿等の目合わせを行い、出荷規格を厳守して、高品質出荷を行うことなどを申し合わせた。ＪＡ全農岐阜の担当者は「現在、春ブロッコリーは高値での販売が続いており、全国的な話題となっている。市場の信頼に応えて、良いものを販売していきたい」と話された。続いて、農林事務所からは生育状況や病害虫対策など、今後の栽培管理について情報提供を行った。

同研究会では、「おはよう」「かいせい 113 号」等の品種を約 1.6ha 栽培しており、昨年並みの出荷量を見込んでいる。高品質な出荷に向け、関係者と会員が一丸となって「計画出荷・品質管理」に取り組むこととしており、農林事務所も支援を行っていく。

（地域支援第一係）

ぎふ農畜水産物のブランド展開

■ブドウ　産地強化に向けた取組み

【新植した苗の様子】

岐阜市の長良ぶどう部会では、ブドウを９ha 栽培しており、品種構成はデラウェア 60%、巨峰 30%、その他 10%となっている。新たな品種を導入するため、令和４年度に７品種を選定し、令和５年にそれら品種の苗木を定植した。今後、各品種の生育や果実品質調査等を行い、有望品種の絞り込みを行っていく予定である。

また、現在栽培しているデラウェアではジベレリン処理時期が果実品質に影響を与えること、巨峰は温暖化による果実の着色阻害が年々多くなっていること等が課題となっている。これら課題の解決のため、関係機関と連携し、農林事務所はデラウェアではジベレリン処理の研修会開催、巨峰では環状剥皮技術の普及を行っている。その他にも棚栽培での作業負担軽減のため、補助具（腕固定ベルト）の効果検証を行っている。

今後も農林事務所では、古くからのブドウ産地である岐阜市長良地区のブドウの生産、販売向上に向けた取り組みを継続して支援していく。

（園芸産地支援第二係）

■十六ささげ　糸貫ささげ振興会栽培講習会

【講習会の様子】

５月９日、糸貫ささげ振興会栽培講習会が開催された。十六ささげは県の「飛騨・美濃伝統野菜」に認証されている 32 品目のひとつで、糸貫地域等で大切に育てられてきた歴史があり、本県の貴重な資源・財産となっている。

十六ささげは、莢の長さが 30～40cm ほどと長く、高温、乾燥に強く、盛夏でもよく着莢し、おひたし、和え物などに利用されている。

講習会では、農林事務所から今年の生育状況を踏まえた栽培管理、病害虫防除のポイントを説明し、その後、栽培ハウス内で現在の生育状況の確認を行った。本年は、４名の新規栽培者があり、熱心に説明を聞き、質問をするなど新規品目に対する意欲が伺えた。

糸貫地域では、いちご栽培後のハウスを利用した早期栽培が行われており、本年は５月 27 日から出荷を開始した。農林事務所では、今後も栽培講習会等により技術支援を行っていく。

（地域支援第三係）